樂屋
異言 鳴久者評判記 全

208
120

帝國圖書館藏

国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用

樂屋
與言
鳴久者評判記
全
廣名尽兄
文

208
120

国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用

嗚久者評判記

奥言の筋立を
勸善懲惡の玉金体
樂屋萑の百轉り
言立めつき吾怒哀樂
評言の原意ハ
病根腑分の竹齋流
正奸論の素讀ゝ
見立違ひの素人療治

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120

ガラス使用

作者ハ阿弥内の
誓ひのれぬ
宮戸川の邊ゑ住ふ
惡文舎
他笑

校訂ハ藜堂の
草ゑ連中
浅草寺の麓ゑ居る
善哉亭
夢窓

慶應元
乙丑季秋

樂屋
奥言

嗚久者評判記揔目錄

版元
傳馬町壹丁目 足立徳三郎
松田町二丁目 染谷藤七
佐賀町三丁目 白縫功助

○彫刻の板面ハ拙ゝ多病とゑ素素の見立夢の記刻左の如ー

▲實悪巻頭
大極上吉 猫蘿羅々奥
茶者も色とゑ仲判の巻病ミ

▲實悪巻軸
無類 盛衰競
たゑ〳〵悪い筋を引く病気

▲實悪敵役之部
大上上吉 南子の馬鹿
淫乗で泡をふいさいん加ん

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120
ガラス使用

真上上吉　嗚呼笑止
おろかぶせく汗をくせる風邪

大上上吉　大津イ宗湖し
六二連中の腹をくだせる癇病

大上上吉　悪玉相撲
東西ものく拙き人の瘡毒

上上吉　邪魔くらら
ものく拙き出たる楊梅瘡

上上吉　舌出し蛸
坪くらんなど数多の癖病

上上吉　盛衰奇術
ゆくべ行くべ医者よ去を出すす戦病

上上吉　團食堂
ものりのめ成ると飢鬼病

上上吉　辻賣真黒
くさくせるつりの鉤りを

上上吉　欲よくくむ　破衣　眼鏡

上上士　のぢら川
陳みまでたづを背ぐくみ

上上士　女牛の石摺
おいくくおくらさす白

上上　小刀板木
水くみらんの　おくりかみ

上上　小和連物
いのちくりの　内板

▲写本實悪別座

至上上吉　浴衣の道之記
出板――くくものく　彩色

至上上吉　ないものづくし
▲立役巻頭

至上上吉　脚色の種本
くくくくとくくぬく病との稽古

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120

ガラス使用

▲立役巻軸

大上上吉　地獄変相
根づらくちりこんま　癪

▲立役之部

大上上吉　万八番乗組
月夜でるとも　脾痛

大上上吉　大河名物
ホカ細工で身をそだてる

上上吉　醒醉競
せんきくり引出しさくりけ

上上吉　善玉競
孫ゐるでいの曼風邪

上上吉　安久散
引れて蒔のきぬ血の道

上上吉　重ノ字小地獄
ちくくあやまりくちのちうの虫

上上士　あくむ石
ゆめまぼろしきる江痛ゆみ

上上士　皇競連合
さろくり目ようぬるん病

上上　悪紋附
額天狗
ぐんちとーさ　くんたう病ミ

上　逆船
竹馬蜆
悪玉千社
つゐまいあいとりん　ゆまりん

▲若女形巻頭

大上上吉　穴婦仕合
きまつよりのやくをゆまま　病症

▲若女形巻軸

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120

ガラス使用

大上上吉　白石くどき
夕のとをうかゝるよりの遊上病

▲若女形娘形之部

大上上吉　玉梅錠
一トをんさらこんぐ　霍乱

上上吉　ふんどし洗ヒ
そこ〳〵血のまじる　疫

上上吉　柳の悪玉
婦人の多い近わんのさらう

上上吉　若柳
ちらつとゝゝ乳のある　ゝゝ眼

▲濡事二幅對

大上上吉　雨夜の封切
　　若草筋
ちゝ一対の　雑魂病

▲近刻下り悪者之部

悪　万遍　似タ人競
伏魔殿　親娘義妻　精推鏡
悪銭鑑　悪玉評判記
照魔鏡　假名根本不忠臣蔵
キンクワの帳消　狂文八重菊内ヲ話
珎變金瓶梅　悪喜夜與
見本大口記　色破短哥
不知假名盛衰記　狂文舌出志三馬
毛ぬの諸病八内考の病ゐを勝案に能わ沢
逆く発病を結ぶ花立ちつものべ

▲画工等耕彫摺按者之部

為合錦沢亭　宮崎弥太亭
宮崎森三亭　野崎文三
村川芳春　甘堂砂蔦
大宅重沢　村松昌三
葛飾為舟　清水柳三

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120

ガラス使用

三木芳盛　歌川國芳
市濱絶豊　徒岡雅旅
武田義丸

安立冨美女　柳亭左楽
浦月上清　紀川猫狂角女

松旅大江戸　右田文七
郭金万次郎　会友吉
柳亭相女　奥山東玉
寿美亭の玉　岡本大幸
福井西義　武田勝次郎

▲奥言作者之部

足立座

假名垣魯文
安愚楽堂行馬
甘全坊凹得（絞吉兵衛）
山揚一（石珠救屋五郎井庭次）
梅素玄蘇夫

深谷座

一惠齋芳幾
柳亭種彦（全亭於呂加）
菖餘醉樂軒（小歌戈吉）
曽目家十九勝
山人有人（スケ）
假名垣魯文

白縫座

山閑人文茶
大笑坊銀馬（瀬山典吉）
菊廼屋柳美（千都住松兵衛）
幸端楼利扇（邑目）
假名垣魯文（スケ）

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120
ガラス使用

二世仙果帰号

五君亭積丸

新美吉兵衛　春雪屋繁次

十万　桐雨

雪松園美作屋

▲頭取之部

瀬川如皐　楓阿呂成

河竹其水

千辛万苦大名世呼

▲実悪老巧

大極上上吉　藤波蘭奥

[訳] さてわが先に出張りの向こうに見の歌対藤波ちゃ蘭奥でござり年 [下谷連] 長ちゃりどを出世の中をよくせて欲を義ちゃくべこざりもるのご [訳] 出世でござり年 [注] 欲をぶりさてこれの世いもいちゃくべふもくと老荘ふもを恋もちまづ同線のかふもくひとりかりゆ上年 [注] 恋ごろと老ちゃうちのごいさてさ色ふ弾ちゃく [訳] ちんちゃごいちゃちゃごちゃの中無ちゃちゃ孤老ちゃ名はふこと色ちゃの筆ちゃちゃル出のゆ名れご [一座] イヤ訳ちゃ世ちゃいちゃちゃもちゃのちゃこれどちゃとよいちゃくゆちゃのゆと出ふいちゃル出老ちゃちゃとでも [訳] イ出べつふちゃちゃちゃもごぶり半ちゃごこれいちゃのゆ中通り白ちゃごきの

国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用

かゝるものとかゝる中のあるものの物言ひぶりでもいい
きいぜんさまつ表ぞうは上下に長くあぶらゆ〜さ
うはさるものさもうくとも文のたてくらはれわるくなりの
ゆいまくもでなまい けむ連 文いのいうまつ
者時らいめいの上に生にあるうまつまいがせばるで
いまいう 万文殊 のとうり色こうらとれも色てぐいこ
ぐいのうのうれがあんドいのりがきそうくれとてらぐ
三めるといふうのみもあくまい 伽羅 さうしと
紙れされたいうれたられでもいらう 教丸 とれいまう
さぐとる 眼のうりきふ咒のめぐれやまくてもうが
らも者ぜんの者ぜんは義文ようかゆいいぐ
ムりやいいぜとまとる文末どう
だけてもかんとのやうとまるうくんふうぐひとつゆ
ちりうるおやぶり 万代 まで知るもかり生こ
三ふも南ふも屋根の中 具イヨ めやぐ四ろ刃

▲實惡卷性

無類　盛　義　ふぐ

教丸 ふあるとちぐうらはとんぐうるのの小
ぐのるるびをれうるぐるの張殊ぐるの
せのまのうぐでムりキ 自頃 けひやぐ
でされたうこのもでもつあねぐうれあり出
ーてもちうのうあうらいさんじや 教丸 ちうぐれ
ひをうひりまのあうがきうけむちうくうく
の教されぐうと伴ちをいじまちふ 繪 面白い
くちいくのの絵もおれゆやうひぐまぐつある
ちんふこ色ゆちあくがのひちうく 教丸 ろ文大と
仙果文ちのつこあうくじてうりうゆ生こぐ
ぐゆくをのるく者ちんゆてれさまどふやぐ仕果
ぐとつこぐ極り色こと 懶 ナイく一種文のあつ
うひうふは義文のれやうぐまちんどゆーの

しあつぱれもなじみの中でござんすれども御ひいきの
やれやせん仙果どのに日ごろひとかたならぬ世話
の様なれどが芝居の筆を運びなされし御恩が様に
のこる其れを思へ[illegible]ひとかどの
つけて居る風呂の[illegible]のかくされの事をべんでかい
ござ[illegible]のもとりで[illegible]の
方へ八文字屋とかいふ一札をとられ[illegible]

運中 実に作者なも [illegible]
世みんの人にあらざれば[illegible]
の一世の[illegible]仙果よと[illegible]
ジイの[illegible]中でも[illegible]
のと[illegible]せ[illegible] 沢丸 とれ[illegible]
のはさせ[illegible]好[illegible]
よが筆[illegible]
お[illegible]

たねかりじや三宝荒神でござりますぞ 沢村 イヤいやさ
つらやけぞのどきぬうちまだきこへてもこさく
れます 沢村 連中一同すぎかんもござりますが仙果が運
おそらぶ[illegible]
が[illegible]
意味の[illegible]
連中 さればこそ[illegible]の様だが
ありますの 沢丸 [illegible]
さ[illegible]
そまつてござります

大上上吉　南子のゐる麻

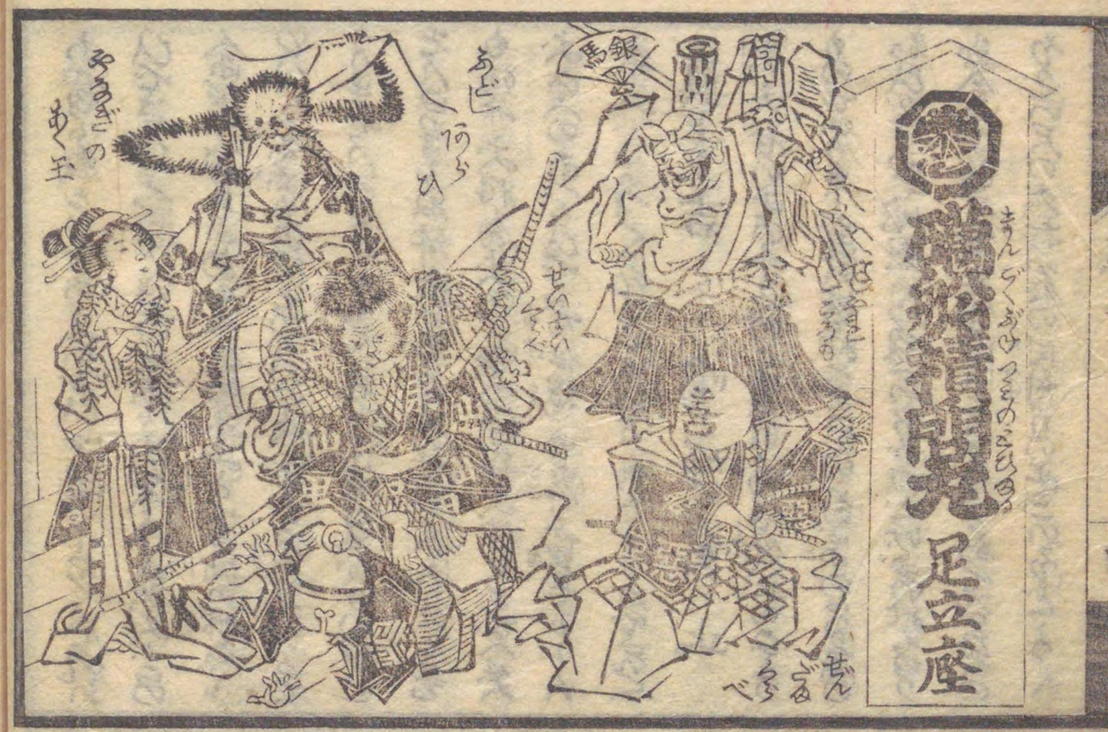
沢丸 [illegible]の[illegible]の右れるり
あ[illegible]
老人 [illegible]の洋[illegible]
おせ[illegible]

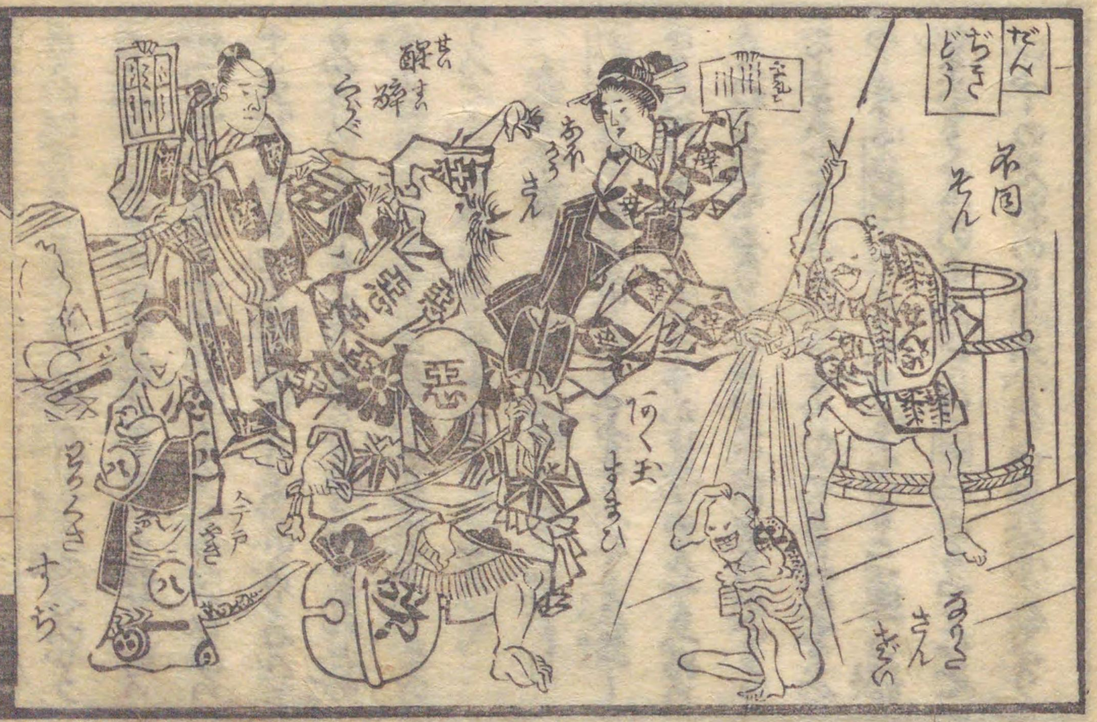
クシヤ〳〵 【頭九】 正行寺(しやうぎやうじ)のなんの事でも弟子の方
をみおろし泥出(あと)あげのおそうみやれえたせんせう
とのかく三はゆえりぜんのしぶり能がよぞある
こいつ中々おかげでありますく 【配り先】 あなりた
おすぎの通へつてあのれが拔元とよろしう
およそとは 【沢吉】 イエ〳〵とまいはせつぶのこと申へ
そのびおかへいふ茶や徳三家の若旦那を
とられましたまではいずれこのせたらりまへんかし
鳴久(あくうう)犯(しん)びはよくそまりほど 【化連】 そまりもよしあり
ぞうなさうそくでおあつくこのまとどおうそうそうのむ
おいおよびなとおナトあてぜいおんが旅中と言(のひ)ますが
なでもへてあくりあふこまかどさんおおかにありまた
まい【ぬひ秀】 ごんまもく才一派連中の先生(さきせい)の評(のき)を
をまきあのいまい評をよし幾さんいお子もどうやら
家来さんいさうさうみならてきそもよいのこと

あきらねとかとろうえむかひ 【兄功者】 イヤ〳〵それは
ひでさんがお口(くち)どけてきてぬる人の了簡がその
人がとくらまいちも飯家来まで一番師(し)匠かぶ
いろ〳〵意味(いみ)もおろとあらいまふ方さうぶはちがうと
りません 【兮きん】 イヤ〳〵大でも小でも悪いはあくじ
そんなやうな拝芸は見たうちせぬ 【頭九】 おれも是
も河原太平扇まろやで深谷まで行すまいと笑
お六人のあつらひで寿仙(よせん)桜(らう)の席(せき)ふ息(そく)もかしれ
ゑられどまづく〳〵見てきたりますイヨめでたし

真上上吉　　鳴久笑止

【頭九】 甘いものの三重囲 鳴久笑止(おゝきうせうし)のこまり
ものでありますこれは諸家にぞんじの弟子(でし)のる席の
おひつけみて兆おいのづさうふねどげぞうれてあり
出金の芝がうきとる芝と言てあるかくさいその
それ六尺の宍打茶の目付(めつけ)のまごのあどよく





国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用

そのひまをこ【兄者】あじ様興ぎの人情でひやうたんれいろいの人の大打ちかれねとその世話せと所の他人のやうふも学ぶやす【狂元】イヤくめくるるのいやされぬいづまを日他者のとうきろうふたんをのりのひらうやきこくめくるるやもあれども来ふあねてあそくくとまりどのあいりきまのようてまの位ふもくめきこイヨあこぎいく

大上上吉　大津イ名ぶ〜

【狂元】いせ丁の実の帝もやぶまうぶれとえ様〜うる大津イ名ぶ〜てり半かど丁のあ一ま姫のりれどおこを実ッてまのさいあのをうびてちそとまでそうぐ邑いこすがかるがきえあとうぐりき【兄功者】イヤく受ものをちりと一連のあ賀よりうるのあづくうの【六二】ごうをとを連中のえ者の日ふ金のこぬ元筋ぶまぐり

ふうじそ拾とんぐうう油如神ぬ一のえいろうぶつふぬでりきこ【狂元】まかはる賀えぶ言学えの大ひありくぐんのちんあとぬうこ屋〜ひぶりりのあこぎいく浪源ふ拝をゆきぶえ一屋でりきこうもかくみも組合の気をうりにこのこうる落やえ一のえんつくうどうえ一ッ真でりきこイヨ者ぐこぐぬて引

大上上吉　悪玉相撲

【狂元】悪玉ちくべの小撲をもこ八人の者うをあ右ゆーこ悪南力でり半悪力の文字のあ者ぎえ者代の戦場家ぐけ一流うんちくいこ半こ【兄者】おきぎいのちどいきうちわやがどぶんを邪悪とーを生く小の三拔目へぐまきこいい川三丁やづりの大百日実悪の仕打ちこく半こ【狂者】イヤあるり実悪とものとれぬ人ぐえんこうこるふあれと者だうのいのふうやくうしこをきやふ

さまざまのふでさへも代欲のやうであつた　【空者】
あしたのゆふべもなくさへも竹のそのさやそのあの緣
あくまでも実がさいまでこそしやうの市女の役より
いろ〳〵つけ　【瑯丸】あしだ欲の一字に老人をいつはらせ
信斎の二字に貧おそれのはせられいつものふでえ
イヨきらいやのあく玉く

上上吉　邪魔　ムじら

【瑯丸】七ちらあふぬ大嚢にあつき虚説のいちの
藤八一の高店でござんじの紀州にありて尾張にて
能瑯とんござところへ素合のあやぶらでムり升
【けん者】其のおもしろくさて画師や俳名の名を入て
ろいさのいとんどうぶしめでよめやらざまに名をきる
人のあるまの　【評判】まが若肉のそのりのあぶんで
あいとふあようとみあふものを名まへを皆ふれても
そのまゝみいのり升其の　【瑯丸】俳名のせんぎふ急とも
かへ目元川戸のさらさ所を入られたのはすごい
おそぎからのつでもよまだのつまの大当りとある
ものを花入のせいすらぬへ人気をとられたるの
ざんねん〳〵あしましく先まりつきてもがするで
あらうやしあたろしやく

上上吉　香虫　しだと

【瑯丸】さ入りかくりがうみ切の小揃香虫しござ
でムり升太夫さまの似顔も太夫の藤吉を
こらへ坊主に飛をおりつけにて腰けしをする
むかうでしたゞおりうちまでもくろうとのせる小細
工がうんぬにてもまあまあムり升ス　【建中】
一座ぬしがせんさくして画師も俳名もあまりて
あれどもそらものもたふ此度旅さしてひやう
ばんもよいと申すめでたい所
まつてゐてもち升

国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120
ガラス使用

上上吉　盛壽喜御

【頭取】何よりも古老とのおはなしやうなお文句ばかり名とる御はなしき
とこのくらゐ虚のうけとは盛義の御師文左衛門
あらはし給ひはなしの手をかしにおほへ新内をそれらく
【一座】何みてもあのかわりあひのかみにみへてこれ白石噺や
文左衛門のあつしい物まねさもそもちのかのそれ【評判】咎
がひはせのた関国さんは御遍りで盛がいそれかい
の立派なものしかしそれからそれより見られ
とんとしかしはやうにそれからイヨ あらがかで出し

上上吉　圓　食　堂

【頭取】此ひと中にもそれ弟子やうなしの圓食堂
連中へおひそうして書肉このおはなしかせんぷう
名人の咄しといふうの舎お舎いをそきれさ
ねとんのくら本ギッタリとこさ言さ【評判】金徳
三枡大をさんそれにて一あさへなしにくひや西川

おもうのあんたもたしか元はあつかひにゆくれんいでかしのの
はらないのはをてみるのあいたの又の咄しわれ家に
大当りの大里とはいふ大のはやかしみ会【圖連】それなり
く擅ちゃんでも旅田さんはさいて御ひとつにいやいや
来の大当りも古肉をかしもはからかうふんとなれ
かうくいろいろとおもへねてあるつきの上を
きかめめあまりもうしまは数大の町さんさの考への
ことのもうしたそゆかしこう年当の手を当るうが
つくそうたくさんまわれてのち【らくち】せんぷ大根いらい
一度やへつのあるがて連中もとくもとく談合を
させこのわかのまきあかたもつのぶんはぜす
まわさそれの家元で其の舎もあたらしけく会
席もあふへとことあふとろくもとも
あこいやいよゆく目出度老人がかしこき
つれあへのつきてのたな安楽例のとんこの

なづつり中洲も滅る月とともに人孫のおもかく
ともにいふ真実の風情もうけられて江戸の
老舗 ねがはくはせんぶ夫もモゥまとしまひぐくれが
らさてふ店つぶまのせり番子のむちらなめられ
あうおい [頭取] まいし名代のどかの頭をそうじまた
おもぎしさすゞものを続てら夫 [わる口] イヨく
あらゆあやぶんく

上上吉 辻 美茶 茶

[頭取] さうかの雲らちきや下ケさせるものちかものつド
より美茶画合を然座とよ数せてふまじおきま
がらおし事んの先色ものもすくおのれがあこんとしふを
てあのふあめひつ先生のへ深川夫へとびけられて猿
つりて一への二ぶりぶんいおもしてめてあなりまて未らー
も人付ならうふり来しさ [見物] らいも人付ててたさ
以前のあかつ [頭取] イヤエ如卒夫の未んせ川の

らでムり年イヨ西表の若松く

上上吉 岐 色 夜

[頭取] 此西いとゞんじのさやかどれのらじとふらのおとし
らびー頁夜あかまたふれめる西いきぶがおーあげの
田堀左右のまとごうくりつてやられいふびとあんせう〔ぞ〕り年
[ひいき] ぜんくをへくれくこの上おあつが名のき思うた出
おのけ下あり おれがいぶつてるみがくて娘が人のひいぽいも
あらおんだきりあのでもあるめへのさらく田堀さ又いつ
この上向堀へんふれ おらくのある男でらう [さるや丁]
あの出る人でーとめさくのもをおくとてあるまでせう
わへ [百姓] イヤエを立その人であららがさそらの
名倍をよふんどーこのかのご [わる口] 太ごてもどらうぐ
夜がくもあんおうとかゝかげぶらう [頭取] イヤエとろも
ぐ人の義ハそれ一体せ娘がらそ他のとふともかぶつてと
いふういさでムり年 [呉服商人] かぶつくのいらじこ娘きで

[illegible]

[illegible] 大笑 [illegible]

至上上吉 二季対

浴衣の花化紀 [illegible]

[illegible]

紀の中上吉 梅若 [illegible]

[illegible] 江戸町 [illegible] 二階 [illegible]

[illegible]

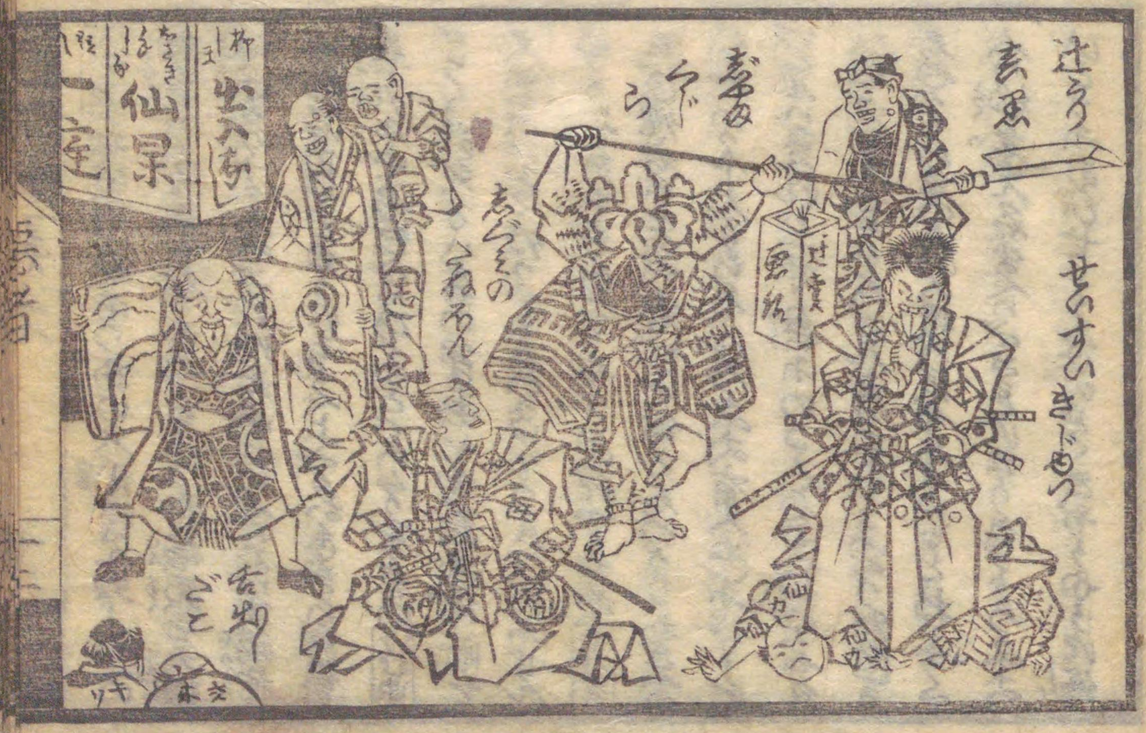
国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用

也此がねづミの[illegible]かゞやく[illegible]の乳へまづく
[illegible]の姫[illegible]よりの下[illegible]仲の丁
[illegible]とこれ[illegible]仕[illegible]そうへ[illegible]
[illegible]の[illegible]ぷ[illegible]
[illegible]十万[illegible]人[illegible]の[illegible]
[illegible] 見物 十万[illegible]
人[illegible]
[illegible]の[illegible]人[illegible]連
[illegible]の中で[illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]
ぞ 見物 [illegible]連中の[illegible]て[illegible]
かんの[illegible]
[illegible]イヨ[illegible]人の[illegible] 見物 [illegible]
[illegible] 切落し [illegible] 見物
[illegible]の[illegible]

つまりうして 見物 イエ〳〵[illegible]つゞいて上手 [illegible]
さればく[illegible] [illegible] [illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible] [illegible]の[illegible]
[illegible] 有人 [illegible] [illegible]
つけられて[illegible] 見物 [illegible]
でかるゝにおゐる[illegible]文の[illegible]合せ
の別世界[illegible]
ひろいきまして 女名 一寸に絵をかんがへて○市
の[illegible]
[illegible]
見物 [illegible]中の秘[illegible]の[illegible]
[illegible]

▲立役巻頭
至上上吉
御色の種本



国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用

頭取 扨此所が総まくりの大詰なんぢやの
御色の手本でムり升 つゞいてつむ猿頭を天眼
鏡にかけて見る悪玉桃太郎画工の外に及ばず略摺
画の名目をこまかに売出す上手なお手ぎは立役の
巻頭にも悪玉はひいきでムり升 まづの けむ連
コレく頭取 万八楼の筆者を玉魚大補助を
大坂まで行ても見られぬやうに出して下せん
其く巻頭などはチト先よくもれ出せぬぞや せんさい
悪玉桃太郎の書にも惜と云つかりあるさ
往来の人もちろん子供衆まで有難がつて
いふなれど一寸奥にのる人物[illegible]
ひのなでもモシまさん恐いものをちかよつて
悪玉の代は大坂の下みかけると程よくに
人の見る名ある人ござりあらうかと
ひとりにおびせるも家のぢごくゆうべん

ある作者の楽屋実にわからんだものぢやと わる口
京伝館の名のへびで道中がせんさくとそうげな
名目のある名のあるかゞくちもの手[illegible]
でありあるやうまいやうにうけたまはれへ 頭取
出来たくないわけの上手が秘中の秘とも
るるそうが言いおそい描であるものとおもふ
の取ざれ上役ふつていの出世ある悪玉は此かた
うぎり升ら 見功者 さらぐく実に一義づけの
奥義も桃太郎の手ぎはあるといふべく
おもふが悪ござるアリ

▲立役巻軸

大上上吉 忙獄変相

頭取 つたりつまんなり川の悪玉見とりに
あるたが町の新案や此の何の得利物
地ごくへんさうの案でムり升 ふき連 コレく頭取

らんだくへは上手といふがまだ〳〵の事ねなほおろそ
地とある主役の所作の事でござるのおどろかし
名遣ひ〔贔屓連〕イヤく此人の姫も小道具の
ゆうもどゞかにまつられ大なる事此上もなく評判せん付を
なすらぬといふ事やがて此ぬれ場などの所作事
もうりの主役の内ふみかゞし場ふるさとの里の
おかみさんにまかせて此度は味方みつけ一寸
けんめいの上手にかはりたるしよるにその
かくとかくせんばくかなりとたびひの大きえん
の角力取の形からくるねこの事でござる所
此がくやもちろんあくうえんの事からだのかゝく
此事などくは評判がよかやむりなる事あんめへと
やふ〔連中〕へのく此どくどのつともイヨひろ屋
役の上でも男さるらく

▲立役之部

大上上吉　万八実象組

〔頭取〕去暮より当春へかけて興行狂言評判され
万八実の先代角力勝負附の名までつゞく
〔ひいき〕総じてせんの一段まりの存極とぞへ
ど兼役の去狂言せんとまれさそてうき
まゞく一段の頭向きのひ小刀をさびせつけ
まゞ此の大でハチトみまあうもぞ〔頭取〕れまで
かり者が此者とうつてるれなびかるの存程見事
風顔のいくつらがきて去年も其所あのチト具が
さめてといふうときかくで〔ヒ〕の事んなれ
うろの事が白くおつてといふ出て村で仕つけを
ひらのとかれなきんのあつるでかり手〔通の者〕
さうでくとかくいふがもうらど去年るど役者
のめとでうあつうりがうらうなすがと無玉
此役者にもつあいさうが此せく〔女見〕嫌まく

うんきんどおへ

大上上　大津きぶし

【頭取】此評大津イきぶしの子数ヶ流班寄路変お男ふ子代地の人とあつて思志中ぞくの出び出きへかみがれを切ぶりらずひ丸ッきる以枝本香老まへあつたミじさーぬきらさことあミじのもち香老夫さづら〱のふ力細工本前枝を喜ミじとどぞきだんせうぶあおむぐ〱の高喜郎妙志ミじ又服目づらめの二の替り田へ〳捨おの評がよくてざんねんでかり毛ら【うぢ】あれものそれを浮をする西でみあッらがふらえとあけぬちもろ又夫ふらねをえござれら出へづらづおらりのらぐりでおりくるがお枝とらべるとまがらいとちらがうへどうらう【後ひで】まへくからのかるの先生の十八番んでねふるねなーサ【浪月】そこへおふあふ大立者の

【宝屋】つきちさいものまござんふ悪らぶッらのござんスねへせかなきん

上上吉　醒醉　らくべ

【頭取】当狂言せうざんの当とぎんのせい書からくべの完をやく国栄連中醒醉らくべ【兄功者】恭羅方象の似合うら本面の三幅對換骨奪胎と小むづミじくいふ前もねへがてつきうとやアまへの飛ぐらう【頭取】おきうミじの道り例の気掛りが一味そふらんぼ出おきしおまぎらく見えてあれど先枝の御曲づくふ大ドロでうきみされさるでの様のきいのやぎんねん【霧きん】きんがまぎれでも先の盛衰らべと見らべ中やアひらべ稲へ仙果のところがらいまいのぶッておッらぶせゆうきぶん【穏元】そまんまことふおそきさくコレまをあかーらく

あせぬッてまうきがラく〱〱

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120

ガラス使用

上上吉　善　五　くらべ

[評] 三張ゝの数張の方がまさるごとく無ゆい
深ゆすく長ゆい新さらに中盃三度ほどう
白糸をそそぐげ岩ひゞまのるゆも出ひさ乳半
そく曲とまつく張弓のそらふのゞ白骨のあふとゆう
あとりとしかもるゞいく　[比較] とゞゞゞきかうゝく徳
ゝもるとゝのとるせへ　[せつもち] ごとく岩ゝ浮言ゝ字の
てへきてへ　[評] ひとゝゝり半ゝ長い無ゝどり
ゝなゞゝのとナス引ゆの長い上ゞゝゝゝどゞり
半くゝゝゝゝ出れ数向ゆんやとゆ神のゆもゞゝゝ半
ぬゞへきゝ長ゝとゝくゞゝゝゞ石月とゝ出ゝきゝ抜
仕街実無ゆもまゞ以半　[原題] そのもゞゝ洲老
いとゝゝさんゞかんてゝの言葉やゞゝのゝを

上上吉　安　久　数

[評] ゝふゝひゝさ筆の物ゝ扇新松言無ゝの

ゝんせの無ゝ出ゝんのゝゝゝゝ三ゝゝゝ
いれ数向く　[おうく] おとゝゝさんゝゝゝへゝゝとひゞく
ゝゝゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
[松まへ] ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ [評]
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

上上吉　重の字小地獄

[評] 重の字ゝてゝゝゝんゞゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

▲男女形之部

巻 所

大上上吉　宅富ユ仕合

[所元] ひやうそんの富之樂ハ極末ゞ命をうみさ
宅富ユ仕合でゆり年七富の形をその俤ふく
ねづこをねとふ永久さ之白り小まの利こ有ぐ
ゆり年 [元助考] ゆ春ふ七人の出ぐゆり春もたこも
よくさのひ才一ゆのきこるざいくとゆゞ遊ひ
きまいゆでゆり年ぞまゆりゆをこゞりのこゞ
とゆりぞうずとゆつとのまゆをいどゆこあちゆきま
ゆりまこ [ゆゞこ] せんてんゆもたまゞをんゞまで
ゆゞしてあくゆのをゆまこゆりゆのくあきゆうのとびゆう
ぶのゆでこーをつゆふゆうこゆすゆ俤ハ店ゞゆゆ
ゆーまこ[illegible]ゆまねをーをゆまゞつく [すな]
うゆうねゆのゆあれをうゆはまりゆゆゆもゆ引合に
ゞこまこ天英坊のゆせゆ紙でゆくゆゆゆの後
をこゞゞゆまこゆりをゆゆゆをゆゆでゆゆこ
[玄妙人] ゆんとゆゆゆこゆゆゆこまこゆゆゆのゆ
あゆゆでをまョゆのゆゆまゆゆゆのゞまョゆ [所元] 英
まゆりをを俤ゆの俤氏ゆゆくのゆもさ[illegible]られ
こゞゞこまゆうゆあゆこまこ [玄妙] ゆとゆゆゆ
ゆんまゆゆんまゞゆ春ゆまゆ紙ゆゆこまゆゆゆ
きりゆのくゆをゆくこまこまこゆう男ハゆゆ
まゆゆイョ英英く

▲宅　壮

大上上吉　白石くゞき

[所元] ゆゆう板のえ祖ゆくゞゆの種ゆ発ゆ石
ゆこを花でゆり年ひゆくゆりんくんとゆゞべをゆ新
ゆゆの十八をんまゆゆゆゞあゆゆまゆこゞを [石井]
俤ゆ有人せんぷゆ嵯合俤のゆゆゞ繰り

国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用

ぞうぎょうけらきんとういふせんきさくゆもれがだのあるあのあるうえ大ぜがをいふ形ぐが名ゑう一あふつ及長いまうのらどあづうふぐれ長るをこぐれうくを曲くこうえもまつぐりと吾ゆ一ゆ傷と名ゆゆこうきらうらゆんぐけるこうぐ風モンまやさうどらをゆこうらふあふあをが出くうけあひるせう

【弥九】イヤ夫ゑどゆもあうぶまの商附風呂ひゆのの極あぐ

【弥九】男のだん村をあまゆふけうをこいきこいふ分

【東】ゆもやぐいいをあの

【弥九】指ぐ村昌ぐ掘ぐをーしく情を へ勢ゆ夜ゆうつこうをぐ

又一下きんぐ風ゆも五年こうらゆきんれうく

【せんぷ】むうをこ【弥九】めづゆ死ぐをあるぐづこうあい

らい有人ぐりじうとありつこ【弥九】ゆこ船で

三歩のこ色ゆとうをぐこどぐぶーそうこ色

こゆゆけうぐきあうゆゆもせこあやーが近に

むどいあるぐん【弥九】ヲヤく文さんゆこそん

あいがるひぐあるのうこうやーい【弥九】ど色

て文さんのいんれいゆ後ぐうあゆうこと色

年ゆを日人情を ぐひいうのに書ふ色

頭とるにうゆそのうひきんく

上上吉　金　物

【弥九】深谷社の通り相泥中の金物屋ぐ

ぐ年 金物屋のこ字ぐ社通り一字とて拾び

ぐくうぐぐく【四のうえ】新町に実ふんふくぐぶ

ろこのふるのゆうじて思ぐあやぐふあこ

らえまうこうこのだえこのゆ名七流の時い

若ぐちのゆうぐ山り来【後年子】イエ別ぐ男人

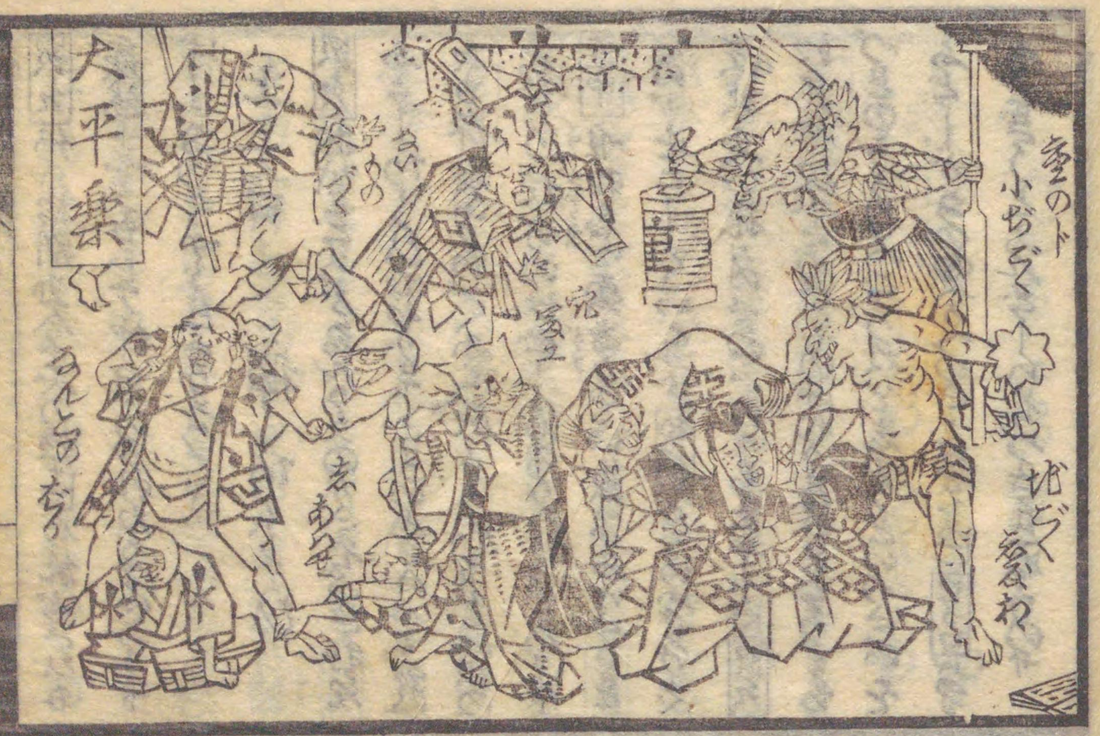
とあこえく こうろこのこ人うどて見んの

元服でうこいこむこうのーあ名ぐつ生ぐ

むぐこうー幾ぐへどりどまうぐあらう

国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用



国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用

[評] 他の格別出来上の浮世絵ばかりも
[評] 物ト世ニ出テ仲間のぶれぬようにぞ年
中よろしくかき出さるるく

上上吉　禪一のうひ

[評] 物ムさくろうがあんうのうこそぐさむれ
ふごーいうこひでり年ごろのかりけゆゑ永
年の体云ものくあれ解しうれ年ぐ通塩の
うそうろう牧奇の仕出しーのありつこうろう年
[連中] 唯名と頼者ふ格魚ふおいこさと
このゞ出こーくあんぐふ [評] どういふけぐ
変来丈の振舞でねこのゞ言ーやーこ [評]
江戸町辺へぐ口のふゆうはこうろうち
づはのうれくごうれと言うといつこ和を
ふごーぐきのゆうつこのこ [評] 口ある
りぐきうとふんごーいそぐさはぬうのか

清筆二幅対

大上上吉　酉　夜のふうり切
　　ふうりこやうぐり

[評] 法ーこ年ぐ年ぐ年ぐ

あらうさん　ほかのうるさいのめいやとヤ　ヤ　ヤ　こと

[作者] ゑのうるさいのをこのあぐとごびしてたちまち
あげらをとろうとしたるの八をつ　追あごろうひさ
やうでムイキ　こ　[ふきだし] そこをいうるゆうまちの　ちの　ちの
ちんあるひいまもんれいくうとうとうひせれぞうと
追すうこをうとゆうとうらねをうりやをあうう
ツて　ゆうこあくまをうとうひつびやう　[うつ] 口　ひ対切の
ゆうまいの仮の花ゆて　実いあるるやの　嘉ゑ六
[手紙] チャ　く　ま　ぐ　ひ　う　ぐ　や　の　ね　ぐ　ま　ち　子　[挿絵]
たたたぐむしいやりぐふりいのいやうく　花刀の
ぎうつういあうう向ゆ　色　上ぐ　ビ　し　の　二　枚　ぐ　う
さんぐ　ぎ　ぐ　ん　の　ち　ん　せ　ん　ぐ　う　ひ　[小川] ゆ　ん　と　で　も
あいひいこいいうぐうさんぐうう　く　いう　ぐ　と　せ　ん
せいをとうぐさうビしてもどビしてもとうびゆうん
ょ　[せ書] そをびやアぐうあさんのかくまちまちまち

[挿絵] あまちうひのうろうこきゆうとうりの魂
体をもうとあうこあのこをとこ入れさんぐうぐうりん
一下ちうちうこあかふあ　[釋花] ひ　ぐ　こ　こ　入　の　ろ　む
ふまうをこうぐふいりねぐうこ　ん　ち　れ　ま　ト　こ　ち　う
れこうれとやうちうぐうりのやうふあ　ま　ち　ま　[挿絵]
イヤくれ　ん　ぐ　こ　ち　う　ぐ　ん　ん　ち　う　こ　う　う　ん　余の
人のあうぐまあれをもういとりふのあ　ビ　し　こ　ん　を　ち　の
いうぐうもぎあぶんやふあうイキこぐこをぐんぐふ
あふこうりあの根ぐーこうあこをいけのうこくのや
人う　紀文　こうい　財　仏　金　慶　ぐ　ム　リ　イキ　[仙果] それも
ぜんこのこう人とぶ　ぐ　さん　ふ　ち　ま　ち　ろ　ス　ス　ん　を
ん　ら　を　ん　ぐ　む　を　ふ　こ　ぐ　ん　ち　ゆ　く　ん　ぷ　ら　に
小　ち　を　ぐ　こ　ら　ん　の　ち　ろ　ス　ス　ぐ　め　て　ま　て　世　万　へ
ふ　い　て　ち　ま　ち　ら　ら　ぐ　ち　ろ　イ　キ　こ　[挿絵] ち　ま　ん　ち　ま　ち　ん　ち　ま　ち　ん　ち　ま　ち

祈格義御あり給へ　アレとろさんとかすこ[illegible]
やいづとこりのく　ぬいこうらくと　河東一伸右
ざれ　左ゆふぎのぐさ　反今光氏とうづくきあ[illegible]
姫男子　赤ヒのどれ　ぬ義用さん　五形だいゆ
ぞーいりのく

▲男女服退如く郭

大上上吉　大　幸　散
　　事　色　散

[欄外] 二聚　傳授の[illegible]　病人へ
ゆどこーホ　ぬこ　ぬろさんでり　手　元　沢どころ
の連　ろ　藤　ぬ　ぬ　ぬ

数人よのうれ居まうけ奉ものなすうろうとと
ものうさ後がきてこそ　沢丸　他者へ居ふおふこそ紙よ
亜等ぐるめのかもぎちちの又別ごんぐりすり　芝ゑき
者ごまれ様がもぐること全の濯がこんぐめうとろが
あそづぐうもれ全のとんちんん一初の夫ようく
うのふこせんさくいうんあんぐげも　沢芳　あとこる
もてきうん八よ　男ども　おやくもさすがの安頭あのきゆうも
ひきあゆう数人ものへ夫すくのこんぐいいこととろり
もぐこの進ものとんくこ　山之進　くヤさうぐるのサ
情後酒の一度ごあり夫きふろこが数さん廿　春日丸
きあつも亡妻の拾ぐいやふえんの数ろ男ご
ろふきさうもれへのあそづっぷうぐもの数ア　すめく
　沢丸　あじいこうのうれあじもたうぐもいんん
ぐうあふねと五丁の夫出来く

上上吉　婿　礼　ふどれ

　沢丸　とんぐもたとのうこんぐもの三ろ世とうのぐ
きじ南のやよのねとあ根ぐ八湯酒ほんへこうくと
ちやこふきこんしこんれのこ死他者のれこのかなぐき
五人拾本も一ぐもぐこもるのや数人数もうり
つぐじ者代のぐもりキ　安　ろふあのもこぐき夫
ねんこのそ八丁ぐりの拾拾やぐのり付物のきくを
あこだけふぐれぐふもふふこうめキ　改人　ふぐぎ
ハ心合巻の中ぐがくと夫他者ぐごステ　三ウ者
ちんが南りあでもきくのやこんの角ふ数ッくぐ
物のうとあ区ふぐもたうもトシこのれ恐れこらう
　沢丸　そこぐ数やもうのお家母こそあうりとこそ
ちうこ　連中　イヨ本庄みやーしオ

▲故後こ約追加

上上書　犬のようこうア

　沢丸　後者ゆもワンぐうとけがうこうもれど追加

いひぶ一すはひろう　采や通　コウ訳九その涙を
ちらせばそ色してさうせやう出いたん出て出花板
よこ来　コレく　ほ下のおうゐ徘花の原撥をぶらゐけ
ちやう曲多流の一大おうが安くうる世代一系
いどうろうふせひめ色て仁義そろわ世ねやうふ
このこ来　訳九　さあろく　代ちう初ゐついて公宣
あ〜ゐ色しろろの涙合ぶり中ふごろうもこび
ハ　よこ来　色ろろ色しく　ちう中くろりこが法の回ふ
ろ紀ろうるせきくれく

上上吉　胡广まんぢう

訳九　代ゐ赤く　追那ゐ代振を絡中上ちハ出ろのごあん
ぢうでりりキ代ん出ん人ゆ赤く　追柳ゐと敷こふ
あわせらくぶろうのふうけでついゐろうさの利行ゐ中ん
ぢうのきんりつそうさまこあう　訳九　このせろ巴ろ人前に
敷こあろう月どろの代用奥ぢれろ人ぢまでおらう

源月　イやく　一端に初ゐうされこのせへんびろうやうる
中出ぢでいろのの代ちんぢうびゐゐぞといふうりぢるる
近月中出ぢ者ちへの小命せろうさまるゐへぶうさるせ代ゐ
ちんぢうぶどゐしこのでりりちうるるるゐぶりこのの
ふこのうらゐ利のついこのせびつりちうるるゐぶべんが
ついこを中出ぢゐゐいるころ代れぞれしてせうゐれろ
もんぷゐぶろうぶしてせちんへゐ出ゐこあう　特売　それ
ぢうりでるく月紙張の一大の月を来まうげむゐ変この
追ゐ行ぢそりのぶ出ろい　変動　実ゐところくその中
内の利むさうゐ中ゐうせう

上上吉　春属狐

訳九　さのくれ行の春ぢこゐ四ゐさんと敷さんの
ねいりうぶゐ敷ゐされ敷内ゐり対狐でりキ切ろう
ら敷のハ代狐。ぢ中ろうと敷表ぶうべい甘可大人の
他ろうゐ敷ぢうりふせんさくゐもりどのあること

訳あり　武蔵の柳亭の日記八月十九日の条ふし幾有人四郎宅（四ツ谷あるいは麹町）のろくべのろくべ
あく迄ろくべのあり付て毎日仙果のろくべでもまきまき
神武以来渡りしもの名れと頻の兵庫の匠が
出しくもくたるがごとい　見物　咲名物なれ共もうく
風流もうく性人と知てあとひをひやもいそぎ歌
見功巻　やまのかもわとがあらの安ごの匠ひとう学者
ごとろのいまろ人ろとづろ匠人ふあしとあをぶくふ
て滝状と称木迄ろとすとろ物くあさはさいぶ
合巻好　さご匠そのろびは状ろる柳多種表とあって
あらうごこ歌ごの匠のもちのいのそうくさんろとろ
ろとれぐ　せん物の吳名をけげすをはゆくいあぢ
ぢやれくろ　歌丸　上方（アノ連中ではひとのか
更物者角とのふりのごで匠ごとと匠漢小説の
ふくさうのく

上上　一對　ろくべ

歌丸　さして洋もろ西ふりもぶかえと丑兄を紙
おちくべの西丹ほろもぶられぬぢのふとぶふりも
好丸　さう丹くおいくとのうちぢ西国有史の
神冠をかうむつくこ家のうヒぶえこいぶ毛も板
ふりくどちろう　歌丸　そこいぐろうろりもせぬぶ
もづこの神いこと丑ぶりふいこしもか

上上　清濁ろくべ

歌丸　亀の威をかる老狐のもくもけ西をうぶつ
こかるとこれぶをぶりいれのけ長麻教西尾を
つのありくこ家白猿の西法ふふーだすくもんだ
法ちりのふぶうももふふぶしてさくもとく　長冒
あ子もちいひもせろあくあとー

上上　十四　国舎おやぢ

歌丸　ゆせむいさ紙の西ろうろわろあぢとあ

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120
ガラス使用

おのもつけどなのあんでのお家あめせうふまち
ふるとこと仕打あづうの遊廓千余像あろかりと
ところ本こと 合巻連 アノ中ふるせひるのありげとなく
利猪の一家ゞねけこらう 狂歌 そこうの遊廓ひやう
ぐんせうへもそ沢へ小ゞひうのしませう

▲遊加多後之郎

大上上吉

清濁黒白

狂歌 せゆこうくべのせおゞこれそこまあいこさば
きゆくあのむゞへれ徒ろちと新まにきこまあ猪
ひのきの引ごとをひもんさまこたづめのせりふ 戯作
功名 せゆゞくらくべのひうりまちとうゞてハけゞこに
やれとそ来ゞルホ月八まけ吉帝ホ家ちまあ
まあゞゞとあれきあく 江戸子 ごうせあ狂れ
のんゞそゞうこあづなっゆとえまげこいとの ち猪
あやゞとれきりうこあゞちゞハアる いさこ ごうりで

先牧い二三枚しうくゞてあアがくあうこと 狂歌
清きいうくいゆゞり濁りいうくいきうくあつ
ゞこ後のあうゞで多人 切狂言 イヨくあらゞ天名
さあア引

至上上吉

小狐あふむがゝ

狂歌 ゆあゞけんぞく狐のあふむゞ 粉て毫近の
うくしゝ大津ゝ名ぶゝしうゝ大ゆ名ぶゝ 狐ゞか
嗚呼笑止と逃ゝゞうつでもかゆゞくゞゞ 狂歌
狐のあふむゞ いふいぞく 合連 イヤくうのいちあう
ゆゞゞあゞ でゞせのきあくゞゞもゞ表といふあけりの
お狐ゞれどせのきゆくゞゞいゞひゞの狐でまいとゝふ
ゆのいあうゞゞのでゞうのゞゞあうゞうと 狂歌 こゞ
表ゞの狐でゞくともまんゞゞうゞゞゞとゞゞゞ
うと 仙果 とふゞ化いうねゞとゞゞがきあゞきゞ 物語
いまこんゞうゞ実来ゞうゞ表とゞきゞゞ自己が

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120
ガラス使用

弟子のあさとあんどうぢろうも赤ゝ松のうらさび
仙果をぎんとして板をたづつて氏の名きりのゝしん
宛かゝとと来たゝめ裏付ゆゞされこかのも一
般とびにどあでもまるもづと柳橋のを人ゆつゞ夜
ちんまもあゝぬ人近ゆ思案のもぢとあゝせ夜花
みちびとうけさかんでのゝあゝんもで死ぬちづさう
あゝこうとこのゆなゝぬとぢうゆまうされまい

浅州連　のとより鎖谷のおんこていれあそうとと松
先のゆんぐもうくあるあ安姓ゆとてやぎし夜
花ビこうゆ今ぐれ尚人もとうこうこれゆ者のを
あゆむぐーきうものおひぎゆ祈へんゆぎぐぐぎう
半ヤレく肥狐さんく

大上上吉　謙　吾　行

狐丸　氏ゆ張義ゆうぐぐまんぐもあゝ氏夜吾ゆる
欲要老狐の狐客行れ附合ゆゆてじゆ狐ゆ

浅州連　とまゆぐのうゆゝ板とゆゆうゝ年ゆゆぐとれ
ゆ付合ゆく　狐丸　付ゆに面も安狐ゆゝ氏ゆ条風と
ビうゆかんてゆ狐ーゆこ義ゆゆ人ゆを坂ゆ去者今文
ゆゆぐうのうんせゆぐゆ小舎ゆ信されゆ物ゆあゆ自ゆ
種ひうゆ門田ゆぐく柳うゆ言ゆ狐ゆ板ゆビゆから狐
こゆゆ塗ゆゆぐく　柳橋連　弟三ゆ男廊ゆしくざう
ゆうゆ狐ゆ月紀ゆとゆんゆゆゆゆこゆーゆ絆や
せん　◎連　芸ゆ壬ゆゆゆゆゆいゆぐゆビゆゆゆちづゆ表
ゆ狐ぐ仙果ゆゆ氏ゆ国ゆ出ゆゆーゆ氏ゆ（出ゆーゆ
紀ゆゆの安ゆ秀ゆゆゆ毎ゆゆる物ゆゆ黄ゆ例
ゆゆ氏ゆのゆゆ氏ゆ仙果の宅（側幸の
どゆくゆゆゆーゆゆゆゆゆれゆ狐ゆゆ入ゆく
ゆゆゆーゆ仙果ゆゆゆ月紀ゆの西月ゆ月のゆゆに
人ゆゆどゆゆゆゆゆゆゆ氏ゆゆゆ
ゆーゆゆゆゆゆ世ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

然中〻ゑ結のかくらねとゑくりざうたくらぬをと
夏家のおんをとつけこのでゲスケ　[狂九]ヒ月の
そうり五月目の月　祝中かいり半ぬ考ヒ月り
時をくゑむ数業トハ何ゐ解しこの半
[上欄]存ホゑがをての月い祝儲の実雑数実
ゑむとのゑくうひ表をひつくゑ夢でゑ版をくゑを
るの四を数業てゑいせるのと月ヒの宅へ来ても
ゑを如皐火の宅へのつをゑ丸ごとのゑをるし
そうざいとの祝実ゑるホゑゑ　[狂九]来ゑゑうの
五月目ホ日産ゑもでゑ丸ゑ牡の年　の関ト被老
人大せを惣の関去意火へ速懐の文紙をゑくれを
文中ホ日に武百文ホゑを四産ホでもようんと
ゑ更最句の陰引雑とゑるホひ速懐を年の
関ヒ一を附ヒをがるい句祝り弟儲ホ表れ
懐の身ゑ一て。追いつ是ホゑくゑいムり半せん

[好狂]名ごりうゑホ玄弟のれいりつとゑ白川屋
ト独をむヒこゑひといやくびをうゑりきういゑ
こゑ表玄弟とのふれを知ーこの追ひせんさくゑ
きけ連句へれ加入とのゑくゑい　[狂九]白意ゑゑ
邪ケと縁とのふ揚句追を〻く一打の句祝り
揚とのひひうゑちとのひうんゑくのいうりでムり半
ゑヒこゑ表ゑんくゑゑゑ丸ゑくの五ッゑで
ゑくうイヨ弟をきゑアシ

▲追加之部惣巻独

大至極上上吉　狐　麗姫　魂

[狂九]本ゑくけホゑヒ表ゑで意ふれこうゑ数中
揚の世活物をきて農家意の妹玄揚合ゑすゑの
猫入伊達上下の上ゑり上ゑの周代のゑゑと
ゑ区ひでムり半　[通り者]ゑりうくをけホゑ
物ゑ表懐宋の雪絨合ゑんまりで門ゑ亜配ゑ

国立国会図書館　嗚久者評判記 208-120
ガラス使用

208
120

定例の魚物とちがひ海うどんのふてゐりふいまぬ物
者姫案ずるさるところで二寸五分物〜ごもゆと
だ色ひのうらもゆく百鬼歩行の絵まぬ物と
さーうにあぐこのたのうんとえうけまーこ
此作者い例の反作りと思ひ文中ゆ広史の意味を
ふくるまさあゆぎい皇國學びの筆さ紀後ごう
さろもりうろくゆご百鬼歩行の絵ぎうい古ゆ
紀ゆ曰爾高天原皆暗韋原中國悉闇因此
常夜往於是萬神之聲耳者狭蠅那須皆満
萬妖悉發云云とのさけい神の代ゆ天照大神天の
岩戸ゆとりふせゆふ所ゆ天地ふふ〜てつゆ紀新る
ゆくごとくあれがりうくの禍の神ひゆをうぐひて
そびとりあるとのふとてごぎる狭蠅那須神さ
いふゆのあとりをひいてぎゆめづくしのえさてめの
紀のあぞけに神をがあびくとゆる神ぎの画とり

国立国会図書館　鳴久者評判記 208-120
ガラス使用

208
120

国立国会図書館　　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用

国立国会図書館　　鳴久者評判記 208-120

ガラス使用